様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２０１２

研究課題名（和文）近代タイ仏教社会における日本仏教者の知的営為：タイ地域研究の新展開と拡大に向けて

研究課題名（英文）Japanese Buddhists in Modern Thailand from 1888 to 1945

研究代表者
村嶋　英治（Murashima, Eiji）

早稲田大学・国際学術院（アジア太平洋研究科）・教授

研究者番号：７０２３９５１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本とタイ国は、世界における二大仏教国であるが、近代における両国の仏教者の交流について、本格的な既存研究は存在していなかった。本研究では、1888年－1945年に渡タイした日本人知識層中、最多数派であった仏教者に着目し、日タイ両語資料文献を広汎に利用し先ず、渡タイ日本仏教者の総数把握に努めた。次いで、17名の日本人僧侶を取り出して、彼らのプロファイル、訪タイの時期、目的、行動及び成果、彼らの上座部仏教に対する思想、評価を明らかにした。戦前のアジア二大仏教国間の交流と知的蓄積を明らかにすることによって、タイ地域研究に新たな視角と研究分野を開拓できたものと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、アジアにおける二大仏教国、日本及びタイ国を対象とし、近代における日本仏教者のタイの上座部仏教との関わりを広汎且つ詳細な日タイの資料に基づいて明らかにした。このような課題を扱った既存研究は皆無に近く、本研究は東南アジア地域研究における新しい研究分野を開拓したものと言うことができると考える。日本仏教者のタイ仏教に対する関心は、1880年代においては未知の南方原始仏教の探究、1900年前後における南北両仏教の連携一致運動、1920年代前後における小乗仏教という否定的評価、1940年代の政治目的による仏教国の親善交流と、時代とともに変化したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Though both Japan and Thailand are Buddhist countries where majority of population believe in Buddhism, there exists no previous in-depth historical studies on religious exchange and intercourse between two countries. This research attempted to find Japanese Buddhist monks who traveled to Thailand from 1888 to 1945. They made research, observation or practices in Thai Theravada monastery. Such Japanese monks, well-known or unknown, were Oda Tokunou, Shaku Soen, Kamimura Kanko, Omune Gyokujo,Endo Ryumin,Tani Dogen, Shaku Daisin, Matsuoka Kankei, Fujii Shinsui, Yoshioka Chikyo, Asano Kenshin, Byodo Tsusho, Yamamoto Kairyu, Ueda Tenzui, Sasaki Kyogo etc.. This research discovered four typical attitudes of these monks regarding Theravada Buddhism. That is, (1) explorer approach to investigate Theravada, (2) unification movement of Mahayana and Theravada sects , (3) underestimation of Theravada and conceit of Mahayana supremacy, (4) Buddhist Unification as a tool of international politics.

研究分野：東南アジア地域研究

キーワード：日タイ関係史　アジア仏教交流史　タイ地域研究　タイ近代史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１，研究開始当初の背景

本研究者は、1975 年以来、主にタイ語の公私文書・諸刊行物あるいは、自らが実施したインタビュー等によって収集した資料を用いて、タイ政治、タイ近現代史（ナショナリズム、日タイ関係、東南アジア大陸部内の諸関係、タイ華僑など）を中心とする地域研究に従事してきた。その間、断続的ながら通算 13 年以上をタイに滞在した。この研究過程を通じて、日本人が戦前に蓄積したタイ（旧名は暹羅、シャム）知識について、まとまった情報・資料が殆ど存在せず、当然それらを前提とした研究を積み上げることができないという知的欠落状況にフラストレーションを覚えてきた。その背景には、日本のタイ地域研究が、他の東南アジア諸国に関する地域研究と同様に、戦後に新たに米国から輸入された学問分野であり、戦前日本の知的経験とは断絶して開始され、しかも、断絶状態は戦後 70 年以上を経た今日においても続いていることがある。

端的に言えば、戦後 70 年間の日本人のタイ地域研究は、近代日本の開始から第二次大戦に至る戦前 70 年間の知的蓄積を参照することなく行われてきたのである。本研究は、このような断絶と欠落の一部を埋め、日本におけるタイ地域研究の研究基盤の拡大を意図した。。

本研究者は、過去（応募当時）5 年間に亘って「日本人タイ研究者第一号　岩本千綱」と題した連載をタイ国日本人会月刊広報誌『クルンテープ』に掲載している。岩本千綱は、1892 年に初めて渡タイし『暹羅探検実記』（1893 年）と『暹羅老撾安南三国探検実記』（1897 年）を著した人物である。クルンテープ誌は言うまでもなく学術雑誌ではないが、本応募者は、岩本千綱に関する収集可能な限りの日本語、タイ語の一次資料を引用して本連載を執筆してきた。岩本千綱は僧形で 1896 年末から 97 年前半に東北タイ、ラオス、ベトナム北部を探検していることから、岩本が真に南方上座部仏教に出家したのか否かを調べる必要が生じ、同時代の日本の仏教関連の雑誌・新聞を読む機会があった。垣間見たそれらの記事から、よく知られている『暹羅仏教事情』（1891 年）を著した生田（織田）得能以外にも、少なからざる日本人仏教者が 19 世紀末、20 世紀初頭に渡タイしたことを初めて知り、また、彼らが日タイ両仏教社会を比較しながら記した大量の記録類が利用されることもなく埋もれていることを知った。

日本とタイは、アジアの二大仏教国であり、それぞれ北方大乗仏教と南方上座部仏教を代表する国である。また、戦前 70 年間において、渡タイした教養ある日本人を分類すると、集団として最多数派は仏教者である。近代における日本仏教者たちの積極的な渡タイは、日本仏教とタイ仏教の本格的接触・交流の起点となり、仏教的価値が支配的なタイ人を刺激興奮させ、タイ人にも自らの上座部仏教を他と比較しようとする機運を生じさせたはずである。

日本語資料及び同時代のタイ側資料の双方を体系的に収集し、十分に比較検討すれば、南北仏教をそれぞれ代表するタイと日本の間の近代における仏教交流の実態、渡タイ日本仏教者のタイ仏教と社会に関する知的考察、日・タイ知識人による両社会の共通性と異質性に関する比較論などを明らかにすることが可能になる。それによって、本研究は、近代の初期以来日本人がタイについて蓄積した貴重な知識、および近代タイの大乗仏教世界新発見とも言うべき日本

仏教に関する議論と認識を、初めて、タイ地域研究の中に取り込むものとなり、日本のタイ地域研究に新たな視角と学知を与え、その基礎を拡大することができる。

２，研究の目的

上記のような問題意識から、真宗大谷派の生田得能が、プラヤー・パーサコーラウォンに同行して渡タイした 1888 年 3 月から、第 2 次世界大戦終結の 1945 年までの間に渡タイした日本人仏教者（僧侶）をできるだけ多く把握した後、渡タイの様子が判る記事、文献等が残る仏教者を取り出して、彼等のプロファイルを明らかにしたのち、彼等の上座部仏教の観察、調査、実践等を調査する。これによって、日本人仏教者が、熟知する日本仏教と比較しながら、上座部仏教及び関連文化をどのように認識したのか、及び彼等の認識には時代的変遷はあるのか、を明らかにすることを目的とした。

３，研究の方法

上記期間に渡タイした日本人仏教者の総数を把握するために、外交史料館所蔵の旅券下付表（マイクロフィルム 115 リール）から、宗教・仏教視察等を目的した渡タイ者を取り出した。彼等のプロファイルを仏教年鑑、諸人名録等によって調べ、続いて、彼等のタイにおける活動や観察が判る資料を、日本の仏教関係新聞、雑誌（例えば、中外日報、令知会雑誌、仏教、六大新報、宗報、浄土教報、禅宗、伝灯、宗教界、新仏教、ピタカ、海外仏教事情など）及びタイ語仏教雑誌（サンガ報告、タマチャクス、プッタササナーなど）から取り出した。また、刊行されていない個人文書も、遺族等に連絡して提供を受けた。必要に応じて、日本国内及びタイに出張（たとえば信教の自由に関する祈念碑調査のためチェンマイ訪問など）を実施した。

４，研究成果

下記の章立てからなる、400 字原稿用紙 1500 枚程度の研究書をほぼ完成し、2020 年末までには刊行予定である。

第１章　近代における在タイ日本人数の推移と邦人僧侶数

外務省記録「海外在留本邦人職業別人口調査」（1897―1926）

第 2 章　旅券下付表から見た訪タイ日本人仏教者一覧（1888―1945）

　　真如法会のシャム・ラオス探検計画

　　社会主義僧佐々木徳母（真宗本願寺派）

　　ニセ連枝の仏教調査計画

　　釈興然一行の来タイ

　　一度も訪タイしなかった大谷光瑞

　　大物スパイと疑われた野沢悌吾

　　増山顕珠の訪タイ

　　日暹寺使節団の訪タイ

日暹寺派遣留学生、泉虎一
大本教のタイ進出、筧清澄
秋守常太郎のチェンマイ訪問
上村真肇の訪タイ研究
第３章　生田（織田）得能（真宗大谷派）の留学、出家回避（1888―1890）
第４章　釈宗演（臨済宗）、タマユット派出家の蹉跌　（1889）
第５章　上村（かみむら）観光（曹洞宗）の暹羅・安南半年訪問（1897－1898）
第６章　留学僧、学成らず、概旭乗（浄土宗）遠藤龍眠（曹洞宗）（1898－1906）
第７章　大三輪延弥の『渡暹始末』と南亜宣教会計画（1900）
第８章　溪道元（黄檗宗）の「暹羅国行脚物語」（1905―1912）
第９章　武田恵教・水澤泰澄・宮本英龍の在タイ華僑布教と布教権問題（1907－1908）
第 10 章　訪印途上のタイ立寄、広田言証（真言宗）（1907）、松岡寛慶（臨済宗）・釈大真（真言宗）（1910）
第 11 章　立花俊道（曹洞宗）の訪タイ(1918)、東元慶喜のパーリ語研究
第 12 章　藤井真水（真言宗）の沙弥出家（1933）、吉岡智教（真言宗）の比丘出家（1936－1940）
第 13 章　浅野研真による日タイ仏教青年会の親善交流と「日暹仏教交渉史考」（1937）
第 14 章　日泰文化研究所主事平等通昭（通照）（真宗本願寺派）（1940－1943）
第 15 章　学究山本快龍のタイ仏教調査、学術的発見と政策的提言
南伝大蔵経寄贈の山本快龍使節と泰国仏教の特異性分析（1941）
第 16 章　国際仏教協会タイ派遣の上田天瑞（高野山真言宗）の計画変更（1941―1944）
第 17 章　大日本仏教会タイ派遣佐々木教悟（真宗大谷派）の沙弥・比丘出家（1944－1945）
文献リスト

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 村嶋英治	４．巻 2018年4月－8月号
２．論文標題 バンコクの日本人	５．発行年 2018年
３．雑誌名 クルンテープ	６．最初と最後の頁 計25頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村嶋英治	４．巻 29
２．論文標題 「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ（シャム）前の経歴と移民事業を中心に（中）」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 アジア太平洋討究	６．最初と最後の頁 141-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村嶋英治	４．巻 33
２．論文標題 「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ（シャム）前の経歴と移民事業を中心に（下の1）」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アジア太平洋討究	６．最初と最後の頁 153-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村嶋英治	４．巻 27
２．論文標題 岩本千綱の『暹羅ラオス安南三国探検実記』をめぐって：探検の背景と実記の質	５．発行年 2016年
３．雑誌名 アジア太平洋討究	６．最初と最後の頁 13―59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村嶋英治	4．巻 39
2．論文標題 タイ国における第2次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史：未利用資料を中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アジア太平洋討究	6．最初と最後の頁 1-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 村嶋英治
2．発表標題 堀井龍司憲兵中佐手記をめぐって
3．学会等名 タイ学会
4．発表年 2017年

1．発表者名 村嶋英治
2．発表標題 1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業
3．学会等名 日本タイ学会
4．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

1．著者名 村嶋英治	4．発行年 2019年
2．出版社 早稲田大学アジア太平洋研究センター	5．総ページ数 339
3．書名 天田六郎氏遺稿　シャムの三十年など	

１．著者名 Eiji Murashima	４．発行年 2018年
２．出版社 Waseda University Institute of Asia-Pacific Studies	５．総ページ数 59
３．書名 Masaya Shiraishi and Bruce M. Lockhart eds,Essays on Vietnam and Thailand during the Second World War	

１．著者名 村嶋英治	４．発行年 2017年
２．出版社 早稲田大学アジア太平洋研究センター	５．総ページ数 187
３．書名 『堀井龍司憲兵中佐手記、タイ国駐屯憲兵隊勤務（1942-5年）の想い出、付録　18方面軍参謀　原寿雄少佐手記』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

天田六郎氏遺稿、シャムの三十年など
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=46464&item_no=1&page_id=13&block_id=21
バンコクの日本人、タイ国日本人会月刊誌クルンテープ連載
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=41867&item_no=1&page_id=13&block_id=21

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考